

書 評

帝国書院編集部編『百年前の地図帳・教科書から読みとく大正時代の日本—解説書付』

帝国書院 2017年11月 5,800円+税

今日ほど多くの方が日常的に地図に触れている時代はないのではないだろうか。それはモバイルメディアとしての地図を小さな端末の中に持ち歩き、必要があれば直ちに検索できるようになったからである。GPS機能を使って、瞬時に場所を特定できるようにもなった。したがって、今や地図は、地理学者が持つ特別な道具ではなく、誰もが手軽に利用できる日用品になったといっても過言ではない。

しかし、地図は目的地にたどり着くため経路を示す単なる道具というだけでなく、地域の多様性を知り、独自性を相対化、構造化して理解し、時に過去に遡り、私たち自身が生きる世界を空間的、立体的、そして歴史的に見せてくれるという魅力も持ち合わせている。それゆえに、デジタルデータで均一に表現される地図が普及し、身近になった昨今だからこそ、道具としての地図だけでなく、地図と地理学の本質的な魅力を今一度じっくりと考え直してみたいと思うのは、おそらく評者だけではないだろう。

そう考えた時、1917(大正6)年の創立以来、日本屈指の魅力的な地図帳と教科書を製作し続けてきた帝国書院が創立100周年を記念して出版した本書『百年前の地図帳・教科書から読みとく大正時代の日本』はまさに、これから地理学を学ぼうとする人、地理学の学生、教員、研究者はもちろん、広く一般の人びとの手にも届けたい一書である。それは、本書の内容が「地理学とは何か」、「地域を理解するとはどのようなことか」という問いに、真摯に向き合う姿勢に貫かれているからである。「帝国」という言葉は当時、今でいう「グローバル」や「国際」という意味を込め、新進気鋭の響きとして用いられたのだという¹⁾。

一見すると、創業当初の地図と教科書の復刻が本書の主たる目的のように思われるかもしれない。しかし、充実した内容の解説書を合わせて読むと、じつは本書が帝国書院の創業者、守屋荒美

^お雄が情熱を注いで目指した「地理学の理想のかたち」を、満を持して今日、あらためて世に問いかけようという意欲に満ちていることに気づかされる。「百年前の地図帳・教科書」から読み解くことができるのは、タイトルに掲げられた「大正時代の日本」の様子だけでなく、「地理学の本質と魅力」でもあるといってもよい内容を備えているのである。

地理学を志す人でなくとも、おそらく「地図」といえば中学、高校時代に一度は手にしたことがある帝国書院の地図帳を思い浮かべる人は少なくないのではないだろうか。評者もその一人である。なぜか眺めたくなる、いつの間にか見入ってしまう、気がつくとその場に足を運んだような気分になっている、そして実際に行ってみたくなる。帝国書院の地図にはそういう魅力がある。

それはいったいなぜなのか。復刻された2冊の地図と教科書に対する「解説書」がその謎を解く「鍵」の役割を果たしている。本書を読了して、その魅力は帝国書院の創設者である守屋荒美雄の人生や人となりに深く根差して生まれたものなのだと理解できたことは、評者にとって大きな収穫であった。その点については、本書の構成を述べた後、詳しく述べていきたい。

本書は下記に示す(1)(2)の復刻本と(3)その解説書の3分冊から成る。まず構成をみてみよう。

(1)『帝国地図』(大正9年刊)復刻(59頁)

帝国位置図／帝国区割図／関東地方図／東京市区附横浜市図／奥羽地方図／本州中部地方図／濃尾平野地方図／近畿地方図／近畿地方主要部等図／中国及四国地方／瀬戸内海図／九州地方図／台湾地方図／北海道地方図／樺太地方図／朝鮮地方図／帝国委任統治図／山地半島岬埼等図／河海湖海峡図／海流図附帝国絶島／雨量図等温線図／師管区海軍区図／帝国交通図

(2)『帝国地理』(大正7年刊)復刻(190頁)

総論

第1編	地方誌
第1章	関東地方 区域／地勢／産業／交通／所誌
第2章	奥羽地方 区域／地勢／産業／交通／所誌
第3章	本州中部地方 区域／地勢／産業／交通／所誌
第4章	近畿地方 区域／地勢／産業／交通／所誌
第5章	中国地方 区域／地勢／産業／交通／所誌
第6章	四国地方 区域／地勢／産業／交通／所誌
第7章	九州地方 区域／地勢／産業／交通／所誌
第8章	台湾地方 区域／地勢／産業／交通／住民／所誌
第9章	北海道地方 区域／地勢／産業／交通／住民／所誌
第10章	樺太地方 区域／地勢／産業／交通／住民／所誌
第11章	朝鮮地方 区域／地勢／産業／交通／住民／所誌
第2編	概括
第1章	自然地理
第2章	人文地理
結論	国勢と地理

(3) 『解説書 百年前の地図帳・教科書から読みとく 大正時代の日本』(49頁)

序

地理教育にそそぐ守屋荒美雄の情熱／『帝国地理』の「緒言」にみる守屋荒美雄の想い／『帝国地理』発刊当時の地理教育／『帝国地理』・『帝国地図』の関わりと位置づけ

第1節 『帝国地図』解説

『帝国地図』の特筆／関東地方・東京市附横浜／奥羽地方・本州中部地方・濃尾平野地方／近畿地方・近畿地方主要部図／中国及四国地方・瀬戸内海／九州地方・台湾地方／北海道地方・樺太地方・朝鮮地方／帝国委任統治地図と六つの主題図

第2節 『帝国地理』解説

『帝国地理』の特筆／関東地方／奥羽(東北)地

方・本州中部地方／近畿地方／中国地方・四国地方／九州地方・台湾地方／北海道地方・樺太地方・朝鮮地方／自然地理／人文地理と結論

(1), (2)の内容は(3)の深い洞察によって詳細かつ的確に解説されているため、ここではそれを繰り返すことはせず、守屋の人生と帝国書院の原点ともいえる2冊の地図と教科書の関わりを追っていくことにしたい。

まず、前提として留意しておきたいのは、「解説書」序『『帝国地図』・『帝国地理』の関わりと位置づけ』で詳しく述べられているように、地図と教科書は不可分のものとして併用されることを目的に作製されていることである。2冊を並べて読んでいくと、それが実感される。『帝国地図』は前半で各地方図を示し、これは『帝国地理』の第1編「地方誌」と呼応する。その後続く6つの主題図、すなわち山地半島岬埼等図、河湖海峡図、海流図附帝国絶島、雨量図等温線図、師管区海軍区図、帝国交通図は、第2編「概括(自然地理、人文地理)」と対応している。つまり、前半で地誌学、後半で系統地理学を学ぶ構成になっているのである。

「解説書」に詳述されているように、『帝国地図』は守屋荒美雄が帝国書院から刊行した地図の中で、最も古い地図であり、その後の地図製作の礎となるものであった。まず、全頁、23図がカラー印刷であるという点が目を引く。時代を反映して、国家領域として示される中に、「第8章台湾地方」,「第10章樺太地方」,「第11章朝鮮地方」が委任統治地として含まれていることにも留意したい。『帝国地理』も同様である。帝国書院が創立した翌年の1918年は、第一次世界大戦が終わり、戦勝ムードに沸く一方で、各地で米騒動が起こった時代でもあった。こうした時代状況の激動の中でこの2冊が刊行されたことを理解する必要がある。

では、守屋はどのような想いでこの地図や教科書を作製したのだろうか。帝国書院を創立する以前、守屋は六盟館から地図や教科書を刊行している。その中のひとつ『動的世界大地理』(大正3年)の自序は次のような言葉から始まる。

興味津々たるべくして、却って乾燥蠟を嘔む

が如きは、是れ当今の地理学にあらずや。社会に重んぜらるべくして、却って蔑視されつつあるは、是れ当今の地理学にあらずや。世道人心を裨益すべくして、却って無用の長物視せられつつあるは、是れ当今の地理学にあらずや。

……

地理学は未だ確乎たる原理・原則の発見せらしもの少なくして、今尚ほ幼稚なる学科たるを免れず。²⁾

つまり、これまでの地理学は無味乾燥で面白くないため、学問としての社会的な役割も十分に果たせていないという切実な問題意識がまずあったということがわかる。守屋は数々の教科書執筆活動の中で、しばしば「動的」という言葉を用いているが、それは動きのないこれまでの教科書を乗り越えて、生き生きと動きのある教科書づくりを目指さなければならないという意味表示にほかならなかった³⁾。激動の時代を生き抜くためには、絶えず変化する経済活動や社会の局面を理解する必要があるのだと考えてのことだったのかもしれない。ひいてはそれが、地理学の地位向上につながるのだという主張は、今日なおその意味を失ってはいない。

そして、『帝国地理』の冒頭では、それは自分ひとりで成し遂げるのではなく、地図や教科書を使う教育者諸賢こそが、絶えずその修訂を繰り返すことで、真の地理教科書が大成するのだと説いている⁴⁾。それは、教育現場こそが生き生きとした地図と教科書を生み出す場であるという守屋自身の実感にもとづいた提言であるように思われる。

『守屋荒美雄傳』や⁵⁾、伊藤智章による守屋荒美雄の評伝によれば⁶⁾、稀代の地理学者と目される守屋は、働きながら教員資格の取得を目指し、「文検」を経て文部省より地理地誌科の中等教育免許状を下付された人物であった。日々顔を合わせる児童や教育の現場こそが、守屋と帝国書院が目指す地理教育の原点にほかならなかった。当時の教科書は帝国大学や高等師範学校の教授が執筆するのが一般的であったところ、守屋は現場のニーズをくみ取りながら、自身の「講義録」をもとに、新しい地図や教科書を生み出していったのである。その意味で、守屋は稀有な地理学者であったといつてよい。『帝国地図』と『帝国地理』

のように、地図と教科書が相互補完する構成になっているという、今では当たり前であるようなことも、当時としては非常に画期的であった。

そのほかに、現場のニーズ、さらに言えば、地理学を学ぶ子どもたちの興味をひきつけ、かつ生き生きとした地域の様子を知ることができる教材として評者が秀逸だと思うのは、『帝国地理』に掲載されている数々のユニークな図である。いずれの図も強く印象に残る。それは、無味乾燥な棒グラフではなく、米の生産量であれば「米俵」、銅の産出量ならば「銅貨」、織物生産量であれば「反物」といったように、一目でわかるモノをイラストにし、それをグラフ表現に生かしているからである。また、各地方誌には必ず、地形の断面図が掲載されている。細かい数値というよりも、大局的な視点で、日本各地の産業や経済構造、地形を理解することを重視した内容になっている。これらの図を眺める子どもたちの楽しそうな様子が目に浮かぶ。

最後に「解説書」についても触れておきたい。本書魅力はなんとといっても、地図と教科書の復刻に合わせて、その詳細な解説が加わったことにある。解説は3つの柱、すなわち①守屋荒美雄の情熱と当時の地理教育について、②『帝国地図』について、③『帝国地理』についてから成る。

復刻された『帝国地図』と『帝国地理』の出版は、これまで述べてきたような確固たる理念に裏打ちされたものであった。解説書が加えられたことで、それがいっそう明らかになり、広く読者に伝えられたことをまず喜びたい。この解説書にはそれ以外にも、さらに3つの意義があると評者は考えている。

第1に地図の配列に時代の要請と政治的意図が刻まれていること、当時重要性が高まっていた鉄道の詳描が見られること、台湾、樺太、朝鮮が含まれていることなど、今から約100年前の時代状況を映す鏡としての地図と教科書を読者に見せていることである。

第2に地形の表記や雨温図・等温線についての解説にみられるように、当時の地理学の水準の中で、帝国書院の目指した地理学がいかに先進的であったかを浮き彫りにしたことである。

そして第3にこの2冊は現代においては歴史地図としての活用が可能であると提言したことであ

る。例えば「濃尾平野地方」で登場する「拳母」^{こらも}がその後、どのような変遷を経たかという問いかけは、まさに守屋が目指した動態地理学の理念と共鳴するものである。それは、100年前の地図と教科書の復刻が、今日さらに新たな役割を果たすために読者の手に届けられたと実感できる問いかけでもある。

100年前の地図と教科書は、地図のデジタルデータが溢れる現代にあって、地図や地理学の原点に思いを馳せる旅に読者をいざなう、絶好の案内書にほかならないのである。

(湯澤規子)

〔注〕

- 1) 伊藤智章「評伝・守屋荒美雄 地理教育に賭けた生涯 (1) 東京・神田神保町 帝国書院本社」地理56-4, 2011, 50頁。
- 2) 守屋荒美雄『動的世界大地理』六盟館, 1914, 自序。
- 3) 前掲1) 52頁。
- 4) 地理教授同志会編『帝国地理』(東京帝国書院蔵版)(帝国書院編集部編『百年前の地図帳・教科書から読みとく大正時代の日本一解説書付』帝国書院, 2017, 3頁。
- 5) 守屋荒美雄記念会編『守屋荒美雄傳』守屋荒美雄記念会, 1940。
- 6) 前掲1) 48-52頁。守谷荒美雄「評伝・守屋荒美雄 地理教育に賭けた生涯 (2) 岡山県倉敷市西阿知」地理56-5, 2011, 98-104頁。同「評伝・守屋荒美雄 地理教育に賭けた生涯 (3) 状況一新橋から皇居へ」地理56-7, 2011, 100-106頁。同「評伝・守屋荒美雄 地理教育に賭けた生涯 (4) 状況一東京・文京区 獨協中学・高等学校」地理56-8, 2011, 101-107頁。